

図1 シミュレーション結果。(a)温度PDFの標準偏差(下横軸)と平均温度(上横軸)の関数としての、総噴出量(黒丸)、爆発的噴出量(赤四角)。(b)総噴出量と爆発性。温度PDFの揺らぎが大きくなるほど噴出量と爆発性が小さくなる。これらの関係は、間欠泉実験で得られた結果と定性的に一致する。

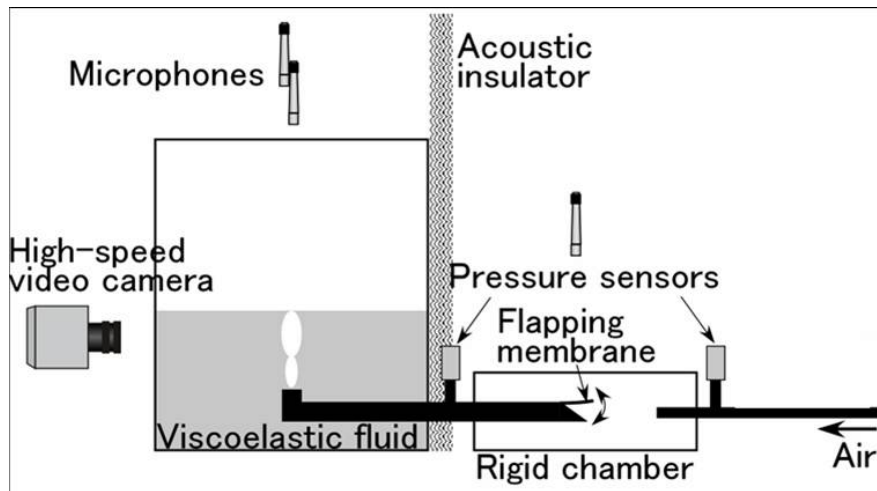


図2 調和振動型の地震・空振を再現するモデル実験。Flapping membraneが周期的に振動することで液中に気泡が周期的に中にされる。液体の粘弾性的性質と流量とのカップリングで気体の上昇モードが変化する。